

荻須高德 《赤いひさしのある家》

想いでのパリの建物と壁

私の家の隣にあったアトリ工村の芸術家は殆ど新制作に属しており戦後間もなくの時期に多分どなたかから入場券を頂いたのでしょう。新制作展を見に行ったとき荻須さんの画に引かれました。

戦争末期に荻須さんは交換船で帰国されており、その際フランスから持ち帰られたものだったかもしれません。昭和二年に渡仏され途中交換船で帰国され新制作に属されましたが昭和二三年戦後最初に渡仏され六一年パリで制作中に倒れ死去されました。

私は中々油絵には手が出ずオギスのリトグラフの多くを集めていましたがだんだん物足りなくなり最初は銀座のためなが画廊で六号位の《肉屋》と言う作品を買いました。交換等でその絵はもう手元にはないのです。佐伯祐三らと一緒に描いた初期の佐伯風から落ち着いた色調、静寂さを備えた作品になります。主にパリの街並み、パリの塗り重ねられた壁を描くようになります。この作品は建物の要素と壁の要素を併せ持っており、私の最愛の作品です。

中井嘉文（東京都練馬区）

荻須高德 《赤いひさしのある家》
油彩・キャンバス 53.0×71.5cm 1930年代
Oguiss Takanori *The House with the Red Eaves*



荻須高德（おぎす・たかのり／1901－1986年）

愛知県生れ。1926年東京美術学校西洋画科卒。卒業後渡仏し、40年まで滞在。40年新制作派協会会員。48年再渡仏。55年神奈川県立近代美術館で回顧展を開催。パリで没、84歳。没後、文化勲章を授与される。

児玉幸雄 《モンマルトル》

記憶に残るモンマルトルの階段

花の都パリと言われるようにパリの街は美術愛好家にとっても魅力的な街です。ルーヴルはじめオルセー、オランジュリー、マルモッタンのピカソなど数えきれない美術館があります。モンマルトルはパリの窓口 シャルル・ド・ゴール空港からパリに向かって左側の小高い丘のように見えてきてサクレ・クール寺院が聳えており似顔絵の画家の集まる広場もあります。当然のこと、昇るも下るも坂道、階段になります。真ん中に金属の手摺がついている階段はモンマルトルの象徴として親しまれています。

児玉幸雄と言えばパリの街中の繁華街を描いた作品が多いのですが（私も一時持っていました）、私はこのモンマルトルの階段やモンマルトルからパリ市街を見下ろす作品のほうが好きで、パリを思い出しながら眺めています。

中井嘉文（東京都練馬区）



児玉幸雄 《モンマルトル》

油彩・キャンバス 41.0×31.8cm 制作年不詳

Kodama Yukio Montmartre

児玉幸雄（こだま・ゆきお／1916－1992年）

大阪市生れ。1939年関西学院大卒。47年大阪市展市長賞を受賞。同年、二紀会創立に参加。57年渡欧、以後毎年渡欧する。三越、阪急、日動画廊、松屋で個展。東京で没、75歳。

三岸節子《花》

華麗なマチエール・お得意の花

思い起こすと今から三〇年以上前に私の先輩のお宅にお伺いしたことがありました。伺って驚いたことは当時はまだそれほど著名ではなかった三岸節子の作品がSMサイズから大きいものまで、何点あったのでしょうか。

さり気なく架けられていたことでも羨ましかったことでした。

何時かは自分も三岸節子をほしいと思いつつと手に入った作品です。

私自身は三岸節子のように絵具が盛り上がるようなマチエールが好きなので喜んで見ております。

中井嘉文（東京都練馬区）

三岸節子《花》

油彩・キャンバス 40.8×31.8cm 制作年不詳

Migishi Setsuko Flowers



三岸節子（みぎし・せつこ／1905－1999年）

愛知県生まれ、吉田節子。1924年女子美術学校を首席で卒業。三岸好太郎と結婚。独立美術協会に出品。39年新制作派協会会員。47年女流画家協会創立に参加。68－89年フランスへ移住。94年文化功労者。大磯で没、94歳。

三岸好太郎 《道化》

絵描きの原点を思い起こさせる絵

私にとって心を震わす程の絵は滅多にないが、この絵に初めてお目に掛かった時の感動は今もなお忘れる事のできないものです。この《道化》は三岸好太郎自身の自画像なのかもしれません。

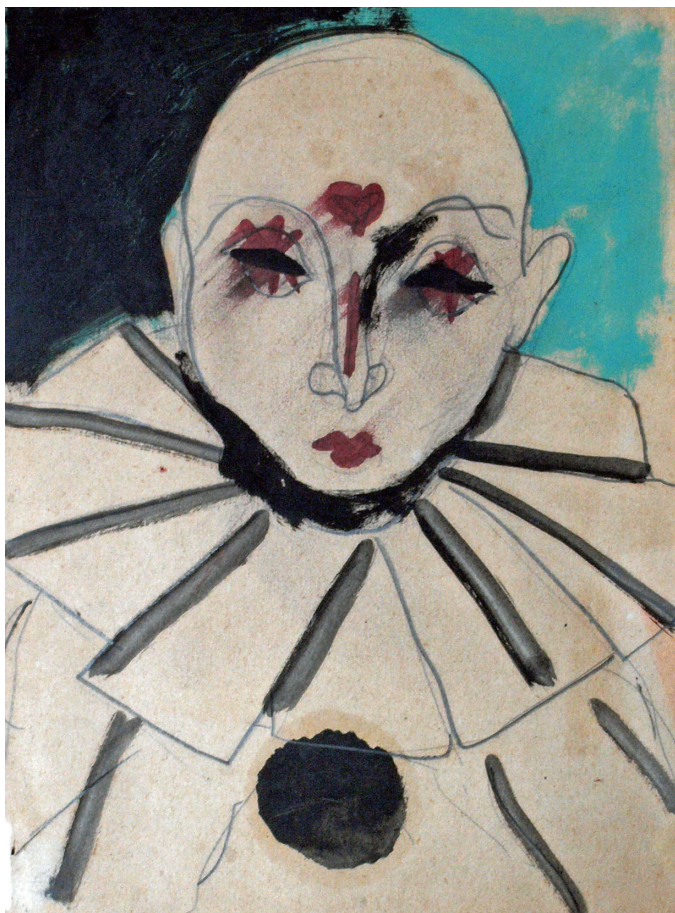
「おいコノキ、絵をかくならお前自身を見つめるところから先ず始めろ！」と、絵に対する精神を叱咤されたように感じると同時に、原点を忘れてはならないと痛感するのです。だからこの絵は画家が持つべき絵だと思いました。そして未だ東京駅前在った不忍画廊の荒井さんに無理をお願いして譲ってもらいました。荒井さんはこれは好きな絵なので売らないでいたものだが、あなたならしようがないねと言って下さり、お陰で今日も、アトリエで制作に没頭する私を叱咤激励してくれています。背筋がピンとします。

此木三紅大（千葉県匝瑳市）

三岸好太郎 《道化》

水彩、油彩・紙 31.0×23.5cm 1932年頃

Migishi Kotaro A Clown



三岸好太郎（みぎし・こうたろう／1903－1934年）

札幌生れ。1924年春陽会賞。横堀角次郎らと麗人社を結成。吉田節子と結婚。30年独立美術協会創立会員。名古屋で没、31歳。77年北海道立三岸好太郎美術館が開館。

長谷川利行 《大八車のある風景》

利行がもたらした縁

この絵は、一九六〇年頃、私が武蔵野美術大学の学生時代に新橋の田村町にあった古道具屋で五〇〇〇円位で買ったものです。その頃は利行を認める人は居ないに等しく、無名の画家でした。デッサンなんかも土間に置かれたりして粗末に扱われていましたが、素朴で文学的で力強かった利行の絵が私は大好きでした。「君、何でこんな格調のない下手な物を集めるんだい」と、或る先輩画家に言われて、「格調って何だ！ 絵が上手、下手、とはどういう事なんだ！」と喧嘩になったり、利行の悪口を言われると身内の悪口を言われたように悔しかったものです。横浜のアトリエの近くに偶然、矢野文夫さんが住んでいて、時々お邪魔をしては利行の話や中村正義さんに可愛がってもらい、利行の話で盛り上がり嬉しい時間を頂きました。

此木三紅大（千葉県匝瑳市）

長谷川利行 《大八車のある風景》
油彩・キャンバス 31.0×41.0cm 1927年
Hasegawa Toshiyuki Scene with a Large Cart



長谷川利行（はせがわ・としゆき／1891－1940年）
京都生れ。1926年帝展、二科展入選。27年二科展樗牛賞。「一九三〇年協会」展で奨励賞。里見勝蔵、鬯光、麻生三郎、井上長三郎らと交遊。日本的フォーヴィスト。天城画廊で個展。40年没、49歳。69年上野不忍池に「利行碑」建立。

此木三男 《僕のアトリエ》

アトリエは僕のユートピア

中学一年の時、初めて絵の具を買ってもらいました。母は「随分高いもんだねえ！」と言って水彩絵の具と間違えて油絵の具を買ってしまったのでした。私はその絵の具の匂いに西洋を感じ、めまいを覚えながら夢中で手探りで油絵というものを描いてみました。キャンバスは洋服の芯地や古いテントを利用したり、その後は、絵の具も高いのでペンキを段ボールに流して硬めて、白い色は亜鉛華と亜麻仁油を練って作りました。その頃は小児結核でした。結核では当時、多くの人が死んでいましたから、私も直ぐに死んでしまうのかと思い、学校の勉強は後回しで好きな絵に没頭したのです。絵を描く事に反対だった父でしたが、絵ばかり描いている私を見かねて小さな木工所の屋根裏に「僕のアトリエ」を作ってくれたのでした。うどん粉を煮て糊を作り、新聞紙を壁紙替わりに貼りました。煤ボケた屋根裏部屋はただ一つの私のユートピアでした。

此木三紅大（千葉県匝瑳市）

此木三男 《僕のアトリエ》

油彩・キャンバス 60.0×72.5cm 1953年

Konoki Mitsuo My Atelier



此木三紅大〔三男〕（このき・みくお〔みつお〕／1937ー）

東京生れ。武蔵野美術大学、ローマ・アカデミア美術大学卒。1976年青枢会創立。油画、彫刻を制作。95年那須高原私の美術館、98年松山庭園美術館、2010年ほくさい美術館が開館。06年上海朱屺瞻芸術館、08年瀋陽国立魯迅美術大学美術館で個展。

山口長男 《趨》

山口先生との思い出

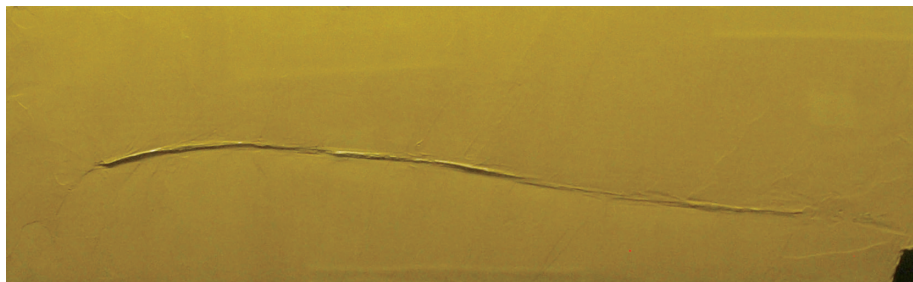
当時の美術学生の殆んどが苦学生で、私は仏壇を売りながら軽トラでの通学でした。山口先生はそんな私を奇妙な目で見ていたと思います。その頃先生の絵は、ラワンのベニヤ板に描かれ、ベニヤから裏の棧に打ち付けた太い釘の頭がちよっと出たりして、木工知識のあった私は「先生、ベニヤはラワンじゃなくてシナベニヤの方が良いですよ、釘打ちなら僕がお手伝いしますよ」なんていい気になっていました。抽象画なんか売れなかった時代で先生は悩んでいました。私は先生と近過ぎて先生の絵を買うなんて事は思いも及びませんでした。先生が亡くなった今になって、絵を集め出した不知恩の弟子だと恥じています。先生の絵を見る度に、先生の芸術を左右するものではないが、ラワンベニヤに打付けられた太い釘が錆びて絵の具を持ち上げ、変色も見られますが、私にとっては、ただひたすらに懐かしさを覚える先生との思い出なのです。

此木三紅大（千葉県匝瑳市）

山口長男 《趨》

油彩・板 16.5 × 57.0cm 1979年

Yamaguchi Takeo Sū (Proceed)



山口長男（やまぐち・たけお／1902－1983年）

ソウル生れ。1927年東京美術学校西洋画科卒。27－31年渡仏。38年九室会結成。45年二科会会員。54－74年武蔵野美術学校／大学教授。武蔵野美術学園長を務める。62年芸術選奨文部大臣賞を受賞。東京で没、80歳。

長谷川湊二郎 《茶器》

こだわりの円にある安らぎ

二〇一〇年、平塚市美術館を皮切りに下関市立美術館、北海道立函館美術館、宮城県美術館を巡回した長谷川湊二郎展が開催された。私はすべての美術館を訪れたが、どの会場でも、ゆっくりとした歩みで、時折じっと立ち止まり作品に見入っている人が多く見られた。これは、長谷川湊二郎の絵が、一見すると平易ながら、静けさを湛えた独特で不思議な世界を持っているからであろう。

この絵を見て感じることは、茶筒、急須、茶碗、茶たぐといった茶器の円へのこだわりである。また、それぞれが並列的に描かれ中心がないことである。それによって、見る人の心に、安定感とゆったりとした平穏な安らぎが生まれてくるのではないだろうか。

長谷川湊二郎の絵には、現実の時間が止まってしまったかのような永遠の時間が流れている。

小倉敬一（埼玉県さいたま市）

長谷川湊二郎 《茶器》

油彩・キャンバス 24.3 × 33.3cm 1976年

Hasegawa Rinjiro A Tea Set



長谷川湊二郎（はせがわ・りんじろう／1904 - 1988年）

北海道生れ。川端画学校に学ぶ。1931 - 32年渡仏。32年二科展入選。43年一水会展入選。34、37、39年日動画廊で個展。フォルム画廊、現代画廊等で個展。平明・静謐な画風で知られる。孤高な画家。東京で没、84歳。

清宮質文 《むかしのはなし》

清宮版画との初めての出会い

清宮質文は時流におもねることもなく、自己の道をひたすら歩んだ画家である。版画一枚ずつを独立した作品としてとらえていたため、同一の作品であっても形、色彩が異なっている。作風は地味ながら確かな存在感があり、単なる叙情ではない深く澄んだ精神的な世界がある。

《むかしのはなし》は、当時青山にあったミウラ・アーツを訪れた際、初めて清宮質文の版画を見せていただいた中で、妻と二人、ともに心惹かれた作品である。

ここには、親の子への愛・慈しみ、子の親への慕いなど、親子の絆の強さが感じられる。そして、ものがたりが聞こえてきそうな気がして胸に迫る。

小倉敬一（埼玉県さいたま市）

清宮質文 《むかしのはなし》

木版・紙 8.2 × 16.6cm 1957年

Seimiya Naobumi *An Old Tale*



清宮質文（せいみや・なおぶみ／1917 - 1991年）

東京生れ。父は画家の清宮彬。同舟舎に学ぶ。東京美術学校油画科卒。慶應義塾工業学校の美術教師を務める。1957年春陽会会員。サエグサ画廊、南天子画廊、フォルム画廊等で個展。木版画、ガラス絵等を制作。東京で没、73歳。

野口謙蔵 《風景》

気高く詩情豊かに愛する郷土を描く

野口謙蔵は、東京美術学校卒業後、郷里である滋賀県蒲生郡桜川村（現在の蒲生町）に帰り、終生その地で愛する風土を詩情豊かに描き続けた画家であった。

この絵を見ていると、「高く清く、飛躍、今私は何か飛躍を前にしている気がする」という野口謙蔵の言葉を思い起こす。

青々と健やかに育った稲、赤土の剥き出した急峻な山、深く澄んだ紺碧の空。

ここには、激しいまでのひたむきさと澁刺とした命の輝きがある。肌心地よい風が青田の上を吹き抜けていく。

そこには、激しさだけではない心の優しさがある。

小倉敬一（埼玉県さいたま市）

野口謙蔵 《風景》

油彩・板 23.2×32.8cm 制作年不詳

Noguchi Kenzo Landscape



野口謙蔵 (のぐち・けんぞう / 1901 - 1944年)

滋賀県生れ。1924年東京美術学校西洋画科卒。黒田清輝、和田英作に師事。郷里に戻り、蒲生野の風物を描いた。平福百穂の指導を受けた。31、33、34年帝展で特選。34年東光会会員。43年新文展審査員。滋賀県で没、43歳。

南城一夫 《猫》

愛しさが描かせた絵

南城一夫は、一九二四年、岡鹿之助とともに渡仏。徹底して西欧絵画を学んだ。帰国後は、日本洋画壇の重鎮として活躍した岡鹿之助と対照的に、故郷群馬に戻り、他の画家とほとんど交流することもなく孤高の姿勢を貫いた。

絵に対する執拗なこだわりと遅筆であったこともあり、残された作品は非常に少ない。詩情溢れる独特の温もりのある画風は一貫している。

この《猫》は、表情が実に愛らしく、思わず微笑んでしまいそうになるユーモアもある。色彩・マチエールも美しい。

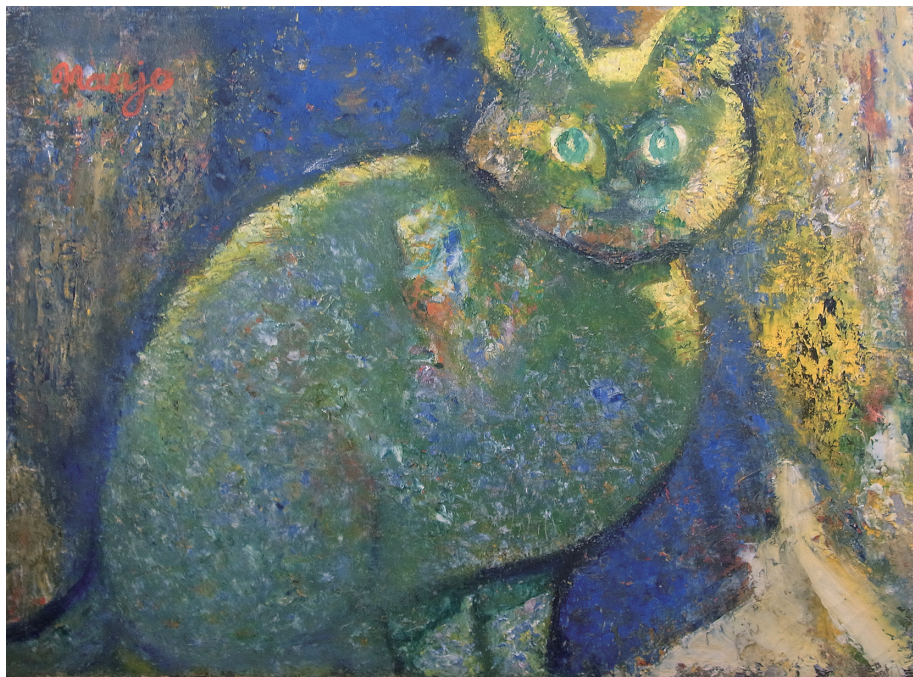
南城一夫には山羊、兎、馬や猫など動物を描いた作品が比較的多い。それらは、どこことなくひょうきんで、心を和ませてくれる。生きものに対する愛しさが、そのような絵を描かせたのであろう。

小倉敬一（埼玉県さいたま市）

南城一夫 《猫》

油彩・キャンバス 24.3 × 33.4cm 制作年不詳

Nanjo Kazuo A Cat



南城一夫（なんじょう・かずお／1900 - 1986年）

前橋市生れ。本郷絵画研究所に学ぶ。東京美術学校西洋画科卒。1924 - 37年渡仏。ロジェ・ビシエール、アンドレ・ロートに学ぶ。42年春陽会会員。兜屋画廊等で個展を開催。81年群馬県立近代美術館で南城一夫展。安中市で没、85歳。

曾宮一念 《富士と愛鷹》

希有なゆったり感

曾宮一念は、日本の風土を愛し、詩情漂う絵を描いた画家である。この絵を見ると、手前の鮮やかな新緑が強く印象的である。そして、目線はその奥に移すと愛鷹山、その向こうに山腹まで雪をいただいた富士山、さらに、ほんわり、ぽっかり空に浮かんだ白い雲が見えてくる。なんとこのんびり平和なことか。富士山と白い雲を見ていると、世間の嫌なことを忘れた幸せな気持ちになってくる。そのようなゆったり感に浸れる絵は希有なのではないだろうか。

小倉敬一（埼玉県さいたま市）

曾宮一念 《富士と愛鷹》

油彩・キャンバス 22.1×27.3cm 1952年

Somiya Ichinen Mt. Fuji and Mt. Ashitaka



曾宮一念（そみや・いちねん／1893－1994年）

東京生れ。1916年東京美術学校西洋画科卒。19年光風会で今村奨励賞。25年二科展で樗牛賞。二科会、独立美術協会所属の後、国画会会員。65年視力障害により会を退会。画業を廃した後も文筆家として活躍した。富士宮市で没、101歳。

荒井龍男 《ボードレールの碑》

絵を描くよりも好きな詩、詩人になることが夢だった画家

憧れのフランスに渡り、真っ先に訪ねた聖地で絵筆を握る画家の姿が目につかぶ作品。
荒井龍男は一九三四年三〇歳の時フランスに渡りましたが、その滞欧作の中でも初期に描かれたものと思われず。

私の好きな一枚です。色彩がとてもカラフルで線も躍動感があり新鮮です。

第一九回二科展で初入選。初期の画業の詳細について資料が少なく朝鮮に在任して絵を描いていたことは判明していません。一説には詩の勉強がたくて日本に帰ってきたともいわれたいます。事実『牧羊神』という詩集を友人たちと発行しています。憧れのパリに着いて真っ先に駆け付けた所がこのボードレールの墓ではなかったかと想像するところです。そんなことを思い浮かべながら鑑賞していただいたら如何でしょうか。

荒井龍男の短い画業の中、しかも死の直前には全精力を傾注して世界に通ずる日本の抽象絵画を目指していました。業半ばでの急逝が惜しまれてなりません。

野原 宏 (埼玉県久喜市)

荒井龍男 《ボードレールの碑》
油彩・キャンバス 62.0×51.0cm 1935年
Arai Tatsuo Monument of Baudelaire



荒井龍男 (あらい・たつお / 1904 - 1955年)

大分県生れ。1924年太平洋画会研究所。34 - 36年渡仏。ザッキンに学ぶ。37年自由美術家協会会員。50年モダンアート協会創立会員。NYリバーサイド美術館、サンパウロ近代美術館、ブリチストン美術館で個展。東京で没、51歳。

北岡文雄 《漁夫と鳥と白い船》

厳冬の北海道厚岸漁港風景を見事表現した風景版画の代表作

漁港の砂浜も凍りついた冬の寒々とした風景が木版画でここまで表現できることに魅力を感じるのは私ばかりではないと思います。風景版画の表現力の素晴らしさに改めて惚れ直した作品です。

浜の賑わいを表す漁船や漁具など時機到来となればいつでもOK、船体の赤と漁師の立ち姿からも読み取れます。大きな鳥は何を表しているのでしょうか、漁師さんと会話しているようにも見えます。春の訪れを告げているのかもしれませんが。

北岡文雄は東京美術学校油彩画科に入学。在学中に版画家の平塚運一と出会い、油彩を春陽会に出品する一方、版画の制作も続け版画部門の創設にも携わりました。版画の作品に秀品が多いので日本を代表する版画家の一人です。

野原 宏（埼玉県久喜市）

北岡文雄 《漁夫と鳥と白い船》

木版・紙 54.5 × 84.5cm 1964年

Kitaoka Fumio A Fisherman, a Crow and a White Ship



北岡文雄（きたおか・ふみお／1918 - 2007年）

東京生れ。東京美術学校卒。平塚運一主宰の「キツツキ会」、戦後は恩地孝四郎主宰の「一木会」に参加。1951年春陽会版画部を創設。55、56年渡欧米。抽象的な版画、木口版画を制作。風景版画に秀品。93年北海道立近代美術館で個展。東京で没、89歳。

愛嘔 《レインボー北斎》

春画を見事に変身させて現代によみがえらせた、作家の感性に祝福あれ

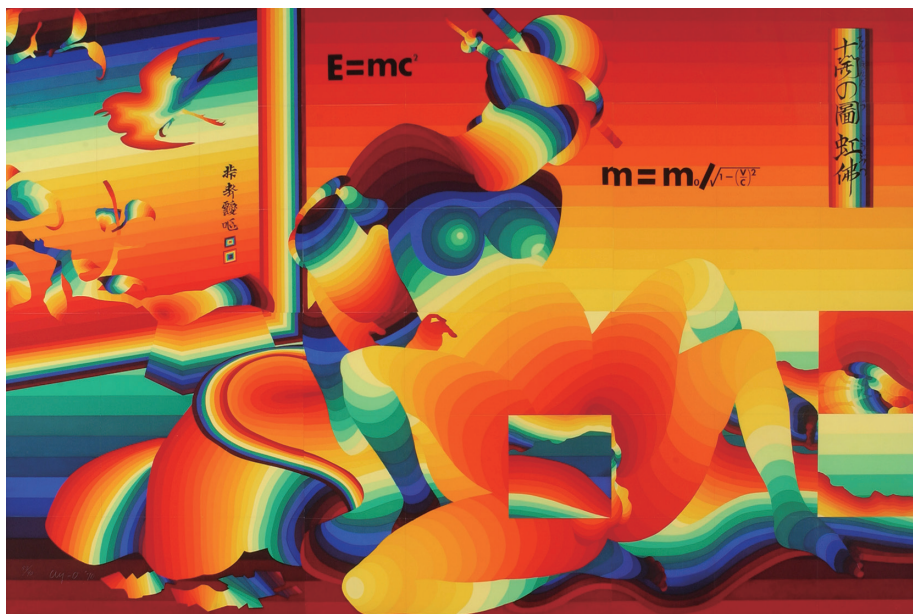
「春画」をテーマにした版画を作りたいとずっと思っていた。でも当時は性描写のことかうるさくて、エロティックなものを正面切って描くことができなかった。だが描けば必ず違う次元が、今まで掘り起こしてこなかったアートの新しい局面が、性表現を通じて生まれるはずだとも思っていた。愛嘔は語っている。デモクラート美術家協会で知遇を得た久保貞次郎に頼み込み春画の名品をアメリカまで送ってもらった。税関でのトラブルを避けるために大きく引き伸ばした写真を細かく裁断して送ったものだ。この作品は一五センチの正方形の五四枚をパズルのように組み合わせるようになって完成するようになっていく。付属の杉の小箱に収納できる。一九七〇年に東京国際版画ビエンナーレで東京国立近代美術館賞を受賞した愛嘔の代表作。

野原 宏（埼玉県久喜市）

愛嘔 《レインボー北斎》

シルクスクリーン・紙 89.0 × 132.0cm 1970年

Ay-O Rainbow Hokusai



愛嘔（あいおー／1931－）

茨城県生まれ。1952年デモクラート美術家協会に参加。54年東京教育大学芸術科を卒業。58年渡米。62年フルクサスに参加。69年ジャパン・アート・フェスティバル大賞を受賞。2016年茨城県玉造に愛嘔美術館が開館。

津高和一 《作品》

線や面・色彩をもって表現した詩のような抽象画

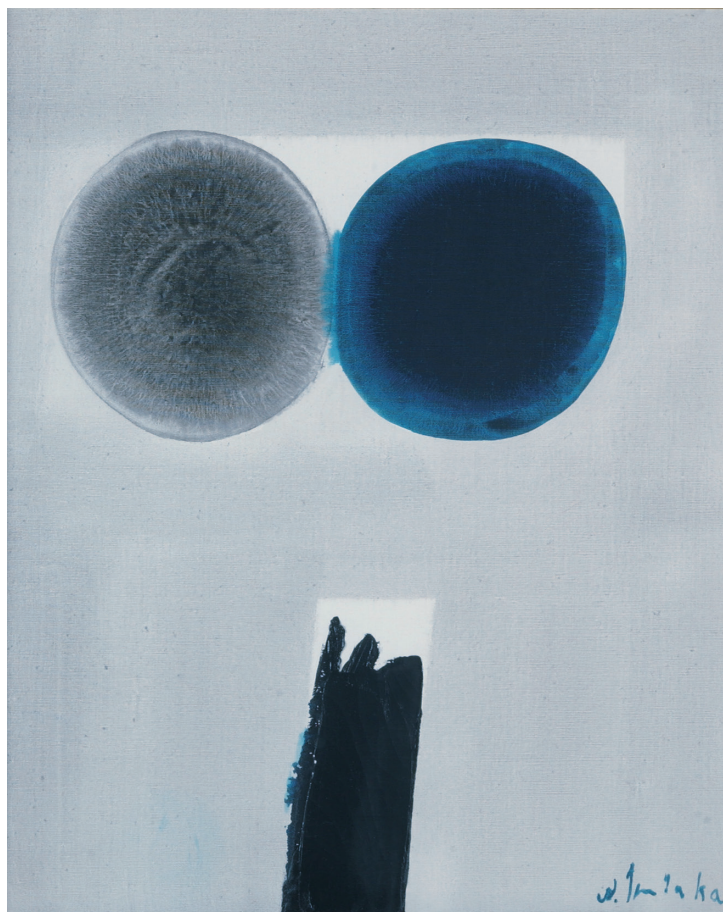
私のコレクションは画家の数でいえば二〇〇名を超えます。洋画物故作家の一九七〇年までの作品がほとんどです。あまり意識することもなく好きな絵を追い求めた結果そうなった次第です。作品の幅が広いといえ、なんとなく納得してもらえないような気もしますが自分自身ではそうとは思っていません。うまく説明することができませんが私の頭の中で抽象画でも描いているような感じで作品をコレクションしたのかもしれないと寂しくなる絵があります。好きです。壁面に沢山の絵を埋め尽くすように掛けて全体を一枚の絵のように鑑賞するのが好きです。不思議なものでいつもどこか視線の届くところがないと寂しくなる絵があります。この作品もそうです。いざこの作品のコメントを書くにあたり大変苦労しました。好きな作品でこんなに文章にするのに苦労するとは思ってもみませんでした。どうしてでしょうか。この絵の素晴らしいところはどこにあるのもいつも同じように誰に媚びることもなくあるがままの自分を素直に表現しているところにあるのかもしれない。

野原 宏（埼玉県久喜市）

津高和一 《作品》

油彩・キャンバス 73.0 × 60.5cm 1962年

Tsutaka Waichi A Work



津高和一（つたか・わいち／1911 - 1995年）

兵庫県西宮生まれ。中之島洋画研究所に通う。1952 - 64年行動美術協会会員。68 - 85年大阪芸術大学教授を務める。67年兵庫県文化賞、86年大阪芸術賞を受賞。西宮で没、83歳。

安藤信哉 《静物》

障害者教育に多大な貢献のあった功績によりヘレン・ケラー賞を贈られた、画家の絵です。

美の表現にはいろいろあります。絵画に限ってもそれぞれの画家により独特のものがあります。同一作家の作品であってもそれぞれよく見ると違いが発見されます。この魅力にとりつかれてコレクターは感動の喜びと苦難の狭間をさ迷い歩くのだと思います。気に入った作品もやむなく手放すことになり後悔した経験をお持ちのコレクターは多いと思います。この作品は大先輩の梅野隆氏がご自身の著書の中で述べておられるように譲ったコレクターがお亡くなりになったのち、わざわざ足を運び遺族から買い戻した一品です。この絵を見るたびに「作品は消耗品だよ」とさりげなくおっしゃられた大先輩の言葉も思い出します。ちょっと矛盾しているようにも思いますがこれも真実です。

個々の作品の素晴らしさはもちろんですが蒐集品にはそれぞれ物語がついています。「絵がすべて」ですがコレクターには他人には見えないもう一つの美があります。

野原 宏（埼玉県久喜市）

安藤信哉 《静物》

油彩・キャンバス 53.0 × 45.5cm 制作年不詳

Ando Nobuya Still Life



安藤信哉（あんどう・のぶや／1897－1983年）

千葉県生れ。本郷洋画研究所、太平洋画会研究所、川端画学校で学ぶ。1938年新文展で特選。40年東京聾啞学校で教える。41年新文展無鑑査。58年日展会員。73年ヘレン・ケラー賞。74年日展参与。日本水彩画会会員。83年没、85歳。

瑛九 《(仮) 花束》

点描とは一味違う色とかたちのハーモニーに魅せられて

瑛九は一六才で『アトリエ』『みづゑ』などの誌上で美術評論などの執筆活動から始め、フォトグラムの制作を行って、第二回自由美術家協会展で荒井龍男を知り、生涯世話になる久保貞次郎、瑛九(本名 杉田秀夫)のなづけ親の長谷川三郎と巡り合い、フォトデッサン・フォトコラージュ・デッサン・水彩・油彩・エッチングなどで多彩な才能を開花させた。デモクラート美術家協会を結成一九五二年から浦和市(現・さいたま市)に転居して活動を続けた。生涯の課題であった油彩の大作に取り組み体調を崩した。享年四八歳。瑛九の場合画家には珍しく、生涯にわたる活動の様子や作品のことなど詳細に記録が残っている。瑛九の伝記ともいえる山田光春の著書をはじめ書簡などもよく保存されている。フォト・エッセイ『瑛九逝』(写真・文 玉井瑞夫)という、出会いから死、そして葬儀の様子までが記録された作品もある。

この水彩は東海道新幹線に乗って私が運んできた思い出の一点だ。点描油彩の一番いい作品は美術館に預けてあると自分に言い聞かせている。水彩の色とかたちはこれが一番と井の中の蛙は満足している。

野原 宏(埼玉県久喜市)

瑛九 《(仮) 花束》

水彩・紙 34.5×25.0cm 制作年不詳

Ei-Q Bouquet (Temporary Title)



瑛九(えいきゅう/1911-1960年)

宮崎市生れ。日本美術学校中退。洋画家、版画家、写真家。前衛的、抽象的な作品で知られる。フォトデッサンを制作。1937年自由美術家協会創立会員。デモクラート美術家協会を結成。創造美育協会に参加。東京で没、48歳。

荒井龍男 《静寂》

カラリストといわれる荒井龍男には珍しい貴重な一点

この作品の制作年は一九三四―一九三六年となっています。三四年の一〇月に渡仏し三六年の七月に帰国してきますので滞欧作と考えられます。荒廃とした枯れ木のある風景画は京都国立近代美術館に《森の部分》一九三五年頃として收藏されています。裸婦はフランスでオシップ・ザッキンに師事した影響を感じさせます。色彩といい構図といい他の作品に類のないものです。生身であるはずの裸婦の一部がバックの枯れ木に同化しているように見えます。右側の枯れ木の左の枝が同化を誘っているようにも見えます。詩人を目指して詩集まで発刊した荒井龍男のことですから思い浮かんだ詩的な情景を描いたのかもしれませんが。

裸婦の部分だけを描いた二二・七×一五・六センチの油彩作品が目黒区美術館に收藏されています。こちらは肌色も素晴らしくカラリストらしい作品です。

野原 宏（埼玉県久喜市）

荒井龍男 《静寂》

油彩・キャンバス 73.0 × 100.0cm 1934 - 36年

Arai Tatsuo *Silence*



荒井龍男（あらい・たつお／1904 - 1955年）

大分県生れ。1924年太平洋画会研究所。34 - 36年渡仏。ザッキンに学ぶ。37年自由美術家協会会員。50年モダンアート協会創立会員。NY リバーサイド美術館、サンパウロ近代美術館、ブリチストン美術館で個展。東京で没、51歳。

野口彌太郎 《セビラの行列》

迷いのない筆さばきと大胆な色づかいに魅了されました

この絵と大きさの異なるほぼ同じ図柄の絵が存在します。しかも一九六三年に毎日芸術賞を受賞した《セビラの行列》です。模写か贋作か頭の中に大きな不安がよぎりました。しかしこの絵の直前のコレクターは独立美術協会で野口彌太郎と同時代に活躍した主要な作家の素晴らしい作品も数多く所蔵されておりました。生前にお会いしてご自身のコレクションについて熱く語られたことも耳に残っております。画廊でこの絵を見かけ、出所がそのコレクターであることを確かめ、迷うことなく入手しました。身近で朝夕楽しんでまいりました。今度の『わの会の眼』には是非掲載したいと考えました。いろいろな人に見ていただくことで判明することもあるだろうと思ってお聞きしたところ、同じ図柄で描くこともあるということでした。話題になった作品を作家が身近においておきたい場合や顧客からは非にと頼まれた場合などが普通考えられるということでした。「その絵を描き出す時には、すでに、その画面はすっかり頭の中に出て上がっていなければ、よい絵画は出来ないと言ってもよいと思う」。画家の言葉に出会い、野口画伯にとっては特別なことでもないような気もしますが如何でしょうか。躍動感あふれる迷いのない力強い線と大胆な色づかいがこの絵の魅力です。

野原 宏（埼玉県久喜市）

野口彌太郎 《セビラの行列》

油彩・キャンバス 38.0 × 46.5cm 1963年

Noguchi Yataro A Holy Week Procession in Seville



野口彌太郎（のぐち・やたろう／1899－1976年）

東京生れ。川端画学校に学ぶ。1922年二科展に初入選。26年「一九三〇年協会」会員。29－33年渡仏。33年独立美術協会会員。52－70年日大芸術学部教授を務める。75年日本芸術院会員。東京で没、76歳。

古茂田守介《小児像》

珍しい古茂田の初期作品

この絵のサインは 守 Komono です、Comono ではありません。美津子夫人のシールもついていて一九四三年頃とかかれています。

作家のサインは真贋の判定に重要な役割をはたします。一般的に知られているサインならばいいのですが、大好きな画家の作品で気に入ったものでもちよっと躊躇してしまいます。見ているうちに最初の感動からだんだんと霞がたなびくように不安が絵を覆ってきます。それでも諦めずに食いさがり、調べて自分のコレクションに加える執念のコレクターはあまりおられないと思います。この絵はコレクターの鑑のようなU氏に拾われたものです。古茂田美津子夫人の存命中にこの絵を見ていただき「お尋ねの Komono のサインは、結婚後私の勧めもあって、初めてフランス風の Comono と変えたのです」と、シールを確認して頂いたことが記録されています。丸い顔の中の目の涼しさ、子供の可愛らしさを余すところなく画面に描きこんだ古茂田の初期の作品です。

野原 宏（埼玉県久喜市）

古茂田守介《小児像》

油彩・キャンバス 45.0 × 38.0cm 1943年頃

Komoda Morisuke *An Infant*



古茂田守介（こもだ・もりすけ／1918 - 1960年）

愛媛県生れ。1937年上京。猪熊弦一郎、脇田和に師事。中央大学中退。50年新制作派協会会員。美術団体連合展、国際具象美術展、日本アンデパンダン展に出品。具象絵画を追究。フォルムの求道者。東京で没、42歳。

坂本善三 《秋果》

存在にそそがれる肯定の眼差し

一目見て強く引き付けられた。見てみると、静寂のトーンのなかで秘められたエネルギーが感じられてくる。不思議な絵だ。この感覚はどこから来るのだろうか。

色調は地味で静かで穏やかだ。沈黙の色彩といってもよいだろう。同系暖色で、朴訥さをおびた筆致で画面に大きく描かれたモチーフには、重厚感ともになつかしさともいえない親しみを感じる。画面の中央を占める四角い皿と球形の果物の武骨な構図。しかし、果物たちは活発だ。厳しく押し合っているようでもあるし、身を寄せ合っているようでもある。それらは息づいている。押されて転げ出したのかと思わせるレモンがかもすユーモア、静かな躍動。死せる静物 (nature morte) としての果物が、わたしたち命あるものを支える源として、活き物としてよみがえる逆説。

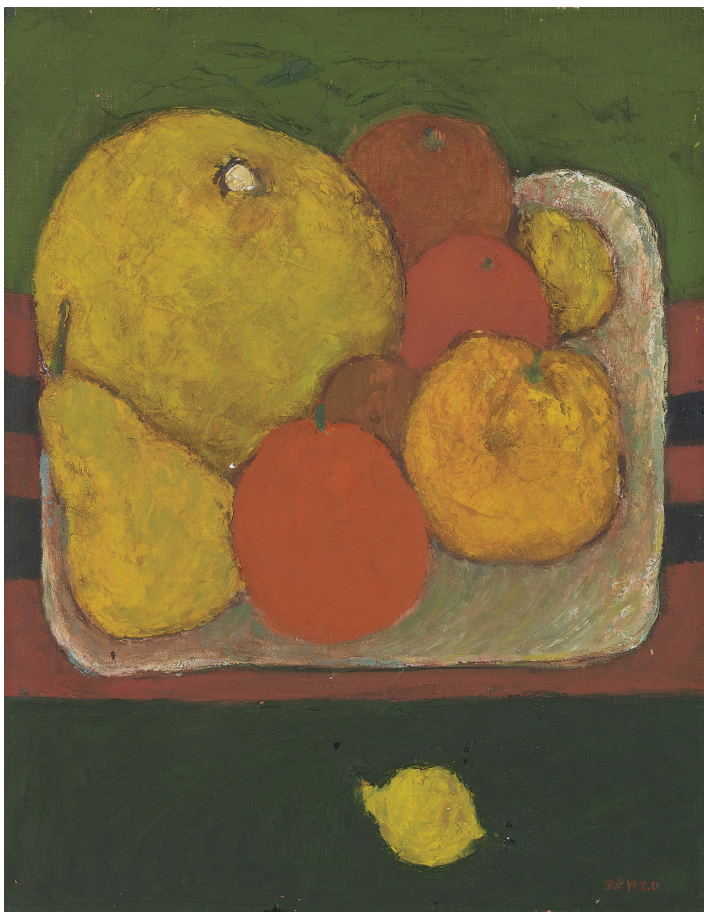
画家の眼は、オブジェとしての果物ではなく、果物が、身近な親しみのある滋養を帯びたかけがえのない生気あるものとして私たちの前に立ち現れてくる、その生命の、あるいは自然の神秘に向けられているようにみえる。その眼の確かさは、存在するものをその本来のあり方としてまるごと肯定しようとする、画家の強靱な資質にあるように思えてならない。

金子茂夫 (埼玉県さいたま市)

坂本善三 《秋果》

油彩・キャンバス 41.0×31.0cm 制作年不詳

Sakamoto Zenzo Autumn Fruit



坂本善三 (さかもと・ぜんぞう / 1911 - 1987年)

熊本県阿蘇生れ。本郷絵画研究所に学ぶ。1931 - 34年帝国美術学校中退。47年独立賞。49年独立美術協会会員。57 - 59年渡欧。68年九州産業大学教授。85年熊本県立美術館で回顧展を開催。熊本で没、76歳。

福井良之助 《作品》

聖なる世界を破る静かな緊張

福井良之助の孔版画は、他の追随を許さない独特の世界を形成している。しかし、それは匠気あふれる圧倒的な世界ではないし、人気や流通性からも隔たっている。恐らく画家の資質や孔版という技法の制約が、その特異性を比類のないものにしていているのだろう。

福井の多くの孔版画からは、時間が封印されている。そこには動きがなく活気がない。しかし無味乾燥な世界ということではない。それは、茶系の色彩を基調に、独特の深みと抒情を帯びたマチエールで表現された、豊かな、しかし静謐な世界だ。俗としての現実を成り立たせる時間を封印することで、個々の現象をこえて、私たちが出会ったこの世界の本質を、あるいは聖なる永遠をつかもうとしているのかもしれない。

この《作品》は、福井の孔版画のなかではいくぶん特異である。濃いこげ茶色のモノトーンの静謐な世界に、激しい肉体の生動が秘められている。豊かな髪、乳房の量感、画面奥上方へ鋭く向けられた頭部、指先から腕、顎へとせりあがる弧の構図の緊張。ここでは、静と動が、永遠（聖）と時間（俗）がせめぎ合っている。これは、画家の内奥に秘められた、表現をめぐる葛藤の証しとみることができないだろうか。

金子茂夫（埼玉県さいたま市）



福井良之助 《作品》

孔版・紙 20.0 × 18.0cm 制作年不詳

Fukui Ryonosuke A Work

福井良之助（ふくい・りょうのすけ／1923 - 1986年）

東京生れ。1944年東京美術学校工芸科卒。54年自由美術家協会展で佳作賞。55年孔版画を始める。59年初個展を開催。66年より度々渡欧。85年長谷川仁記念賞を受賞。相模原で没、62歳。

寺田政明 《河口沿いの風景》

池袋モンパルナスを代表する画家

優れた画家を見つけようとしたら、他の優れた画家の若い頃の仲間を調べて見るのが早い。優れた画業を残した人物の周りには、必ずと云っていい程無名の時代から同様の人材が集まっているからだ。

池袋モンパルナスを代表する画家寺田政明もその一人であろう。一九四三年に結成された新人画会には、寺田政明の他に鬚光、松本峻介、麻生三郎、鶴岡政男といったその後の日本美術史を彩る錚々たる画家たちが輩出している。貧乏コレクターにとっては、今やどの画家の作品も高嶺の花になったが、長寿でたくさん作品を遺したが故か、寺田政明の作品だけは私にも手に入れることが出来た。

寺田政明は、生涯に亘り大きくその画風を変えた画家であるが、私自身は出品作のような晩年の作品に心惹かれる。《河口沿いの風景》と題された本作品は、葉を落とした木の様子から冬の季節であろう、まだ夜の明けない早朝の河口から今にも漁に出ようとする幾艘かの小舟が描かれている。その様子を眺めているのは画家自身であろうか。この夜明け前の情景には闇と光、静寂と躍動、寒と暖といった相反するものが見事に調和され一枚の画として自律している。観る者を引き込み、心の有り様で様々な見方を想起させ、希望さえ感じさせる。本当の美しさとは、こういう世界をいうのではないか。

秋山 功（群馬県高崎市）

寺田政明 《河口沿いの風景》

油彩・キャンバス 45.0 × 53.0cm 1983年

Terada Masaaki Scenery at a River Estuary



寺田政明（てらだ・まさあき／1912－1989年）

福岡県八幡生まれ。太平洋美術学校で学ぶ。独立展、NOVA展に出品。1936年エコール・ド・東京結成。37年独立美術協会賞。39－49年美術文化協会結成。43年新人画会結成。50－64年自由美術家協会会員。64年主体美術協会結成。東京で没、77歳。

オノサト・トシノブ 《作品》

幾何学的抽象絵画の第一人者

芸術とは、文系人間の特許のように考えていたのだが、数学者である藤原正彦氏の著書を読んで数学のできない自分自身への言い訳にすぎなかったことに気づかされた。藤原氏は「美しくなければ数学ではない」とまで言い切っている。数学は抽象の学問であり、究極の抽象は最も優れた「美」に辿り着くようである。

では、幾何学的抽象絵画の第一人者は誰かと問われれば、まずはオノサト・トシノブの名が挙がるのではないか。オノサト・トシノブの作品の多くは、緻密な線と色で構成されている。作品を丁寧に観ていくと、多くの作品の中に円が隠されていることに気づく。本作品作も小品ながら多数の円の重なりで構成されている。

円は、どこまでも欠けることのない絶対的な真理を意味しているとも云われる。禅宗の世界では円相とよばれ、円窓とも書いて「己の心を写す窓」とされて書画によく描かれている。私自身も、そんな発想からオノサト・トシノブの作品を観続けているうちに、抽象画でありながら仏画の曼荼羅の世界を想起した。同様な評が他にも見られたので、その時は意を強くした。

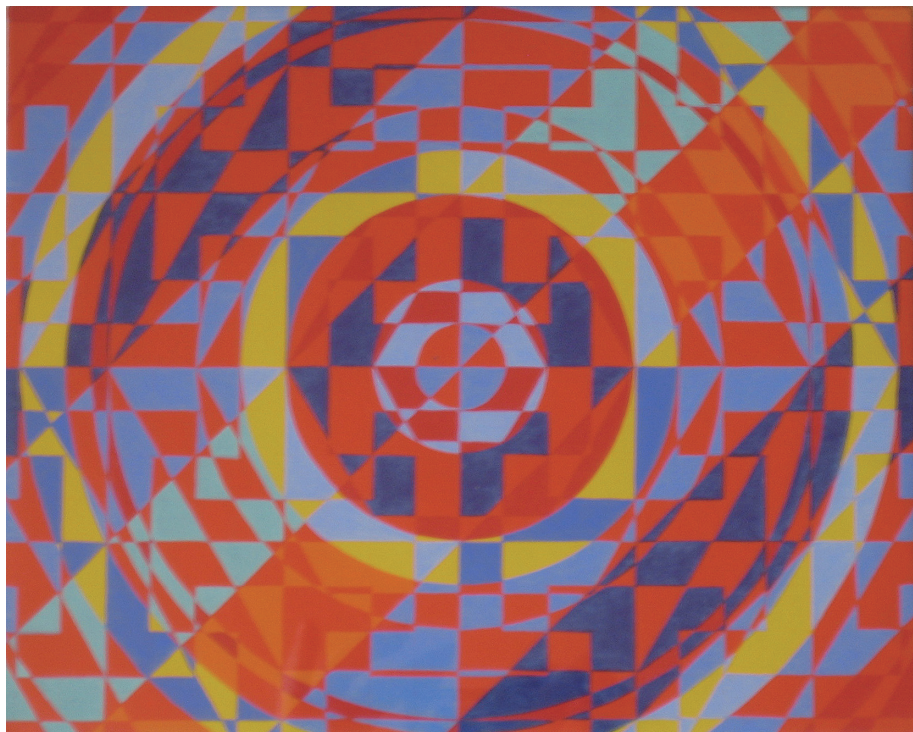
正にオノサト・トシノブの作品は、東洋的な伝統の流れを汲む抽象絵画であり、世界の美術史上から観てもその価値は高く、後世に遺すべき画家であると強く思う。

秋山 功（群馬県高崎市）

オノサト・トシノブ 《作品》

油彩・キャンバス 22.0 × 27.5cm 1976年

Onosato Toshinobu A Work



オノサト・トシノブ（おのさと・としのぶ／1912 - 1986年）

長野県飯田生まれ。津田青楓に学ぶ。黒色洋画展を結成。1937年自由美術家協会の創立に会友として参加、49年会員となる。63年日本国際美術展で最優秀賞。グッゲンハイム、ベネツィア、NY等の国際展に出品し、高い評価を得る。桐生で没、74歳。